

## 八戸ブックセンターに寄せて

島田潤一郎 夏葉社

とこかの地域の首長が、地元の書店の経営をサポートする、そんな政策を打ち出してくれないだろうか、とたまたま夢想する。

たとえば家賃の半分を市町村が負担する。50万円だったら25万円、30万円だったら15万円、10万円だったら5万円。それだけで、本屋をはじめたい若者は続々とこの地域に集まり、その市町村はすぐに「本屋が集まる市町村」として全国に知れ渡るだろう。

書店が10軒オープンし、その家賃の平均が月額20万円と仮定すると、市町村が毎月負担する家賃は100万円。それはもちろん、市民の税金から毎月払われることになるのだが、目的も用途もよくわからない立派な建物をひとつたてるより、10軒の本屋の経営をサポートするほうが、よっぽど住民のためになるのではないか、と思う。

おそらく、あらゆる市町村では本を読む人より、本を読まない人のほうがはるかに多いだろう。本なんて読んでそんなものはなんの役にもたたない、という人はいまも変わらずいる。重要なのは、そういう意見も正しいのだ、と認める姿勢だ。本を読むよりも、人生の先輩に話を聞いたほうが話が早い、という人もいれば、ページのなかの文字を追うより、空や木々、海、犬や猫を見ているほうが豊かだ、と考える人もいる。読書の時間よりも、家族団らんの時間のほうを優先したい、と願う人はそれこそ日本全国にたくさんいるだろう。

では、だれのために本屋は必要か？

ぼくは単刀直入に、それは孤独な人ために必要だ、とこたえたい。

自分の気持ちをうまく言葉にすることができず、だれと話しても、会話がなにひとつ噛み合わない。だからいまはとにかく、一秒でも早く自分の部屋に閉じこもって、スマートフォンの画面を眺めたい。

大人のぼくでさえ、そんなことを思うのはしょっちゅうだから、若者たちはもっと、そんなふうなことを願っているのではないか。

SNSをとおして知らない誰かと知り合うのもいい。自分が好きなアーティストの動画を一日中見ているのも、有意義な時間の過ごし方だと思う。

でも、本屋もいい。

言葉の世界にも、市場原理が働いている。それはどういう言葉をつかえば、あるいはどういう文章を書けば、より短時間で、よりたくさんの人に伝わるか、という競争であり、私たちがスマートフォン

などで偶然目にする文章は、そうした競争を勝ち抜いた、言ってみれば、勝者の文章でもある。

でも、世の中には、そうでない言葉もたくさんある。集中して時間をかけないと味わえない美しい文章。とても個人的な事柄を書いた、誠実で、細やかな文章。とにかく正確さを期することを目的した、ある研究のための緻密な文章。

そうした文章は、読む人をほんのひととき、市場原理の世界から遠くへと連れ出す。それが本の魅力だ。

八戸ブックセンターに並ぶ本をじっくり眺め、ぼくは帰りのバスのなかで、だいたい以上のことを考えた。

市が本屋を運営することの意義はとても大きい。そのことを、もっともっと議論したらいいと思う。

**島田潤一郎** junichiro shimada

夏葉社

本のまち読書会「ひとり出版社・夏葉社 島田潤一郎さんに聞く 本をつくること・届けること」  
(2020)

1976年高知県生まれ。夏葉社代表。編集者としての経験を持たないまま2009年9月、ひとり出版社の夏葉社を吉祥寺で創業。『昔日の客』(関口良雄著)など絶版となっていた著書の復刊からオリジナル企画まで、本と本屋をテーマにした書籍などを数多く手がける。

